

# 特殊幼児の保育

渡辺祝子



## 自閉症のS君

Sは、愛育研究所に二年間、週一回の治療に通いながら、公立の幼稚園に一年通園し、すでに学齢期に達していました。しかし就学は無理と診断され、研究所からの依頼で私どもの幼稚園に入園することになりました。

四十五年四月八日(水)

母親に手をひかれへやに入ったSは、額に八の字をよせ、落着きのない目であたりを見回し、ひとりごとをいいながらほうぼう見て回る。母親に似て背が高い。(一一二cm)

「Sちゃんこんにちわ」と声をかけても無関心。ちょうど園庭の土手の上を汽車が通ると「きしゃ、きしゃ」といって急に庭に

飛び出し、すべり台にかけのぼってじっと見ている。

普通児の行動とはあまりにかけはなれたその様子から、瞬間的に、集団の中に入って危険はないのかしら、ほかの子に対しての影響は、等の不安が私の胸をかすめた。「この子は汽車と高い所が大好きなんです。それに、こんなに広々として今までとは環境も違うし、きつと喜んで通うと思います。どうかよろしくお願ひします」こちらを信頼しきった母親の態度と、もしこれがわが子であったらと思う気持とで、多少の不安はあったが、少しでもよい結果が生まれるよう努力してみようと思い引受けることにした。「入園式は遠慮します」との母親の言葉で次の日から、五歳児(二年保育児)三十七名のクラスの一員に加わりSの生活が始まった。

四月十三日(月)初めての登園

母親に手を引かれ登園する。「Sちゃんおはよう」と声をかけても知らん顔、「くつをとりにかえておへやよ」とさらに顔をのぞきこむようにして声をかけると、べたんとすわりこんでうわぐつにはきかえる。母親からは簡単に離れた。へやにつれてくるといきなり私の手をふりきって表情をこわばらせ、あたりかまわずほかのクラスをのぞいて回る。呼んでもこないのでもそのまま遠くからSの行動に注意する。降園前にクラスの子どもたちに「Sちゃんというの。すこし言葉がわからないのでみんなといっしょに遊べないかもしれないけど、親切にしてあげてね。教えてあげると、だんだんお話ができるようになるわよ」と紹介する。背が高いのに変だといわんばかりの顔をしていたがどうやら皆納得した。

#### 四月二十日(月)

登園するなり母親から「昨日帰りましたら急に『渡辺先生、渡辺先生』と何度もいうのですよ。今までいろいろな先生と接してきましたが、こんなに早く名前がいったのは初めてです。びつくりしました」と報告される。へやめぐりが落着き出すと、興味が砂場に変わった。

幼稚園の門をくぐると、そのまま三歳児の砂場にまっしぐら。汽車があるだけ連結してから、上ばきにはきかえるようになった。上ばき、外ぐつの区別もできるようになった。

#### 四月二十二日(水) 家庭訪問

狭いアパートのへやいっばいに、Sの玩具がすわる場所もないほどきれいにならべてある。この中のものが一つでもなくなったら大変で、幼稚園に行っている間に掃除してまたも通りに並べておくのだそうだ。

Sは正常分娩で乳児のころは手がかからず、おとなしいので、あまりあやしたり、声をかけたりもしないで育ててしまった。そして、保健所の三歳児検診の時「言葉がおそく異常」と診断された。そのうちしゃべるだろうと気楽に考えていたので驚き、それからあちこち相談に歩き、今日に至ったことであつた。なししろ、言葉のつながりに助詞が入らないので、意味がわからず、母親はSの表情や行動で判断し、要求を読みとって何でもしてやっている。Sは、しゃべらなくてもあまり不自由を感じない。これでは、いつまでたっても言葉を覚えなから、聞いても聞かなくても、問いかけたり、同じ言葉をいわせたりして、簡単になんでもやってやらないように、なんとかしゃべる機会を作るようにお願いした。

#### 五月十三日(水) 園外保育

近くの天神様で園外保育。母親付添いで参加。帰りは違った道を帰った。するとわけのわからぬことを口走り、大声を出してみたり、歩道をジグザグに歩いたり、だだをこねる。「往復の道が違ふところなんです。幼稚園の帰りも回り道しようものなら大変

なんです」と母親はいう。幼稚園に帰るのだと話しても聞き入れず、園に着くまできわいでいた。

六月七日(日) 父親参観日

幼稚園の門まではきたが一步も中へ入らず、母親の手を引っぱって帰ろうとしている。日曜日を知っていて、いくら説明してもわからないのでというので、無理をせず、帰ってもらった。曜日と、新聞のテレビ番組には、特別の関心があるようだ。

六月十二日(金)

このごろ、クラス全体で集まるときはなんとなく部屋に入ってきて、そばに寄ってくるので椅子を出してあげるとすわるようになった。

降園前「小さなネコ」の本を読むと、急に大声を発し「ネコ、ネコ、ネコ」といって前に出てきた。読み終わると同時に、待ち構えていたように、私から本をとり上げると、表紙のネコにはおずりしている。その後本立てにしまっておくと、登園するなり出してきてままとコーナーで開いて見るようになった。

毎日ままとコーナーでネコの本を見る日が続いたある日、突然そばにあったクレヨンで表紙のネコをぬり始めた。「先生Sちゃんの本をぬっちゃったよ」と大きわざ。これをきっかけに、自由画帳にネコを書いてあげると輪郭の中をめちやめちやではあるがぬるようになった。クレヨンなどもったこともないので、母親

に話すと驚いていた。

六月十八日(木)

実習生が、ネコの模様のエプロンを掛けてきた。それを見るなり「ネコ、ネコ」と大声をあげ、からだをくねらせてエプロンを引張ったり、にこにこして学生の前や後ろに回ったり、そのうちおぶさったり、抱かれたりした。これがきっかけで、教師にもおぶさったり、抱かれたりするようになった。おぶってもらいたい時は、いきなりとびついてくるので、「Sちゃんおんぶっていの」と教え、いうまでおぶわれないことにした。自分が要求している時は言葉も早く覚え、「おんぶおんぶ」といえるようになった。私が話しかけると、背中から顔をのぞきこんだり、髪の毛を引っぱったり、わけのわからぬことをしゃべったり、満足そうである。いつのまにかSの額から八の字も消え、表情がやわらかくなった。

七月六日(月) 友達の名前を覚える

ままとが好きだが、もっぱら人形をいじったりままと道具をならべたりのひとり遊びであったのが、女の子の仲間に入っていくようになった。

その中にRという髪の長い子がいて、クラスで一番先に名前を覚えたのがRである。

そばに寄って行って髪をさわったり、「Rちゃん、Rちゃん」

と顔をすりよせて親愛の情を示す。あまりそばに来るので本人がいやがって逃げ出すと、追いかけるのが面白いのか、ついて行く。急に対人関係の成長が見られるようになった。

### 九月八日（火）遊びの変化

砂場の汽車から水遊びへと発展する。ほかの子が、ホースで砂場に水を出して遊んでいるのをじっと見ている。「みんなSちゃんもいれて」「いいよ」「Sちゃん、はだしになってごらん」Sはにこにこしてはだしになり砂場に入る。やわらかな砂の感触と、冷たい水が気持ちがいいのか、すっかり気に入ってしまった。

「面白いね。これホースよ」Sはずぐ「ホース、ホース」という。登園するとすぐ砂場に行き、私に「ホース、ホース」という。そこで少しずつ言葉をふやして「ホースをとって」「ホースとってください」「渡辺先生ホースとってください」と続けていえるようになった。こうして次第にクラスの子どもたちに友だちとして認められるようになってきたある日、

「Sちゃんおりこうになったね」とか、「先生、Sちゃんばかりかわいがってずるいよ」と、こんな不満が聞かれるようになった。Sの勝手気ままな行動が許されなくなってきたのである。

そこで皆との約束として、ホースで水を出していても、お集まりになったらやめることにした。初めの二、三日はホースをしようと私につかみかかってきたが、だんだんわかるようになり、



Sがはじめて描いた絵（たま入れ）

「Sちゃんお集まり」というと水道をとめ、はだしの足も洗い、一人でくつをはいてへやに入るようになった。すこしずついろいろの遊びをするようになったためか、職員室に入る回数もへった。

#### 十月十日（土）運動会に参加

夏休みは、カレンダーめぐりがSの仕事だと母親からたよりがあり、その後もずっと続いているとのことだった。父親参観の日登園には失敗したが、運動会には参加させたいと思い、一週間前から家庭と園のカレンダーにしるしをつけ、「この日は運動会よ」といい聞かせていた。当日はその効果があったのか、無事に登園してすべての競技に参加、母親は「今までどの行事にも参加できなかったSが、きょうはちっとも目立たず、見ていて信じられないようでした」と感激していた。二日後にみんなが運動会の絵を書く時、Sもいっしょになって、線書きではあるが、いちばん喜んで参加した玉入れの絵を書いた。

#### 十月二十四日（土）遠足

だいぶ集団行動がとれるようになったので付添いなしで秋の遠足芋掘りに参加した。畑の中を歩き回ったり、時々お芋を掘ったりした。Sの袋を見て「先生、Sちゃんすこしだからわけてあげよう」とみんながお芋をくれたので、袋はいっぱいになり、大事そうにかかえて帰りのバスに乗った。ところが降りる時座席の下に袋を忘れ、気づいた時はバスは帰ってしまったあどだった。

「S（袋に書いてある苗字と名前をいって）お芋、お芋」とくり返し、半べそで大きわぎ。その日は代わりのお芋を持ち帰ったが、夜になっても「S、お芋」が続き、翌日車庫へとりに行き、自分のお芋に面会した時は大喜びをしたとの報告であった。

#### 十二月二日（水）歌を覚える

円になって「えんそく」の器楽合奏をやっていると、突然中央に出てきて歌い出した。みんなはびっくりして合奏をやめてしまった。「Sちゃんみんなと歌いたいのよ。合奏してあげてね」といって、また初めからやる。一番、二番、言葉と音程もしっかりと正確に歌ったので、みんな二度びっくり。たくさん拍手をしてあげる。Sは目を細めて、満足そうであった。

四歳のクラスにも行って、大好きな「不思議なポケット」のうたを「ポケット、ポケット」とリクエストする。ピアノをひくと嬉しそうに歌い出し、後奏が特に気に入って曲に合わせて足をバタバタならし楽しそうに声を立てて笑う。新しい歌をみんなに教える時は、そばにきて私の口に自分の口をつけるようにして覚えようとし、ピアノがひけなくなるほど、体をすりよせてくる。二、三回それをくり返すとほとんど覚えてしまう。少しのんびりしているTよりはるかに覚えが早い。一学期のころ、みんなが歌い出すと、両手で耳をおさえ、へやのすみで小さくになっていたころが嘘のようである。

一月十九日(火) 粘土をやる

ほかの子が粘土をやっているのを見て、私のそばにきて「怪獣、怪獣、ウルトラセブン」といって粘土の塊を机にくっつけて立たせると、バラバラにこわれてしまった。Sは「いたいよう、たすけてー」という。「いたいね」といって私が手や足をとれないようにくっつけて立たせてあげると、「セブン、セブン」と喜ぶ。もつとやってくれと私の前にもつと大きな塊を持ってきたが、ほかの子からも話しかけられ、Sの相手になってあげられなかった。それ以上続かなかった。家に帰っても粘土をいじり始めた。報告があった。上ばきもすわりこんではかなくなった、とび箱、鉄棒にも皆といっしょに参加できるようになった。また紙芝居、絵本等を読み終わるまで一度も席を立たず見ていられるようになった。

二月三日(水) 豆まき

鬼のお面(紙袋)をかぶって豆をまく。Sは「グリーンピース、グリーンピース」といいながらへやじゅうをかけ回ってみんなといっしょに豆をまく。

女の子ばかりだが、五人位の友だちの顔と名前が一致して、はつきりいえるようになった。

## Kの話

「先生、Sちゃんかわいいね」「どうして」「だって、いじわ

るしないもの。Sちゃん、学校へ行けるでしょ」「そうね、このごろお早うもさようならもいえるし、よくわかるようになったものね。だいじょうぶ、行けるわよ。」

この一年間、Sと生活も共にしたこともたちは、彼の入学を自分のことのように気にしている。園児数百名という小規模な幼稚園の中で、自由保育を主体として、全園児、全職員とふれ合う毎日が、彼の成長をここまで助けたのだと思う。

しかしSは、まだ相手からの質問に対して答えられないため、それが友だちとの対話の大きな壁になっている。

しかし私がいっしょになってまごことあそびにはいれば、私と同じように動作や言葉を真似し、遊びが長続きする。つまり現在のSにとっては、相手に自分の気持を伝えてくれる人が必要である。

今後ますます、Sが積極的に友達の中にはいろうとすればするほど、私との接触を必要としてくるだろう。

しかし私は、クラスの子どもたちとも接触しなければならぬ立場であり、ようやく心を開いて来たSを、どのように指導したらよいか……この指導いかなが、これからのSの生活に大きな変化をもたらすのではないだろうか。

(まんとみ幼稚園)